

Title	連携協力会議実績報告
Author(s)	林, 透
Citation	CGEIアニュアルレポート 2011: 201-204
Issue Date	2012-07
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/10704
Rights	
Description	. センター関連イベント報告 / Event Report, (4) 連携協力会議 / Cooperative Meeting

<報 告>

連携協力会議実績報告

林 透 (大学院教育イニシアティブセンター特任准教授)

A Report for Cooperative Meeting with Sokendai

Toru HAYASHI

(Research Associate Professor, Center for Graduate Education Initiative)

Abstract : Center for Graduate Education Initiative has a plan to have a cooperative meeting periodically. The second cooperative meeting was held to promote the organizational relationship with Center for the Promotion of Integrated Sciences, Sokendai. We had recognized the common tasks each other and learned the usefulness of interdisciplinary dialogue for graduate students.

[キーワード：組織的連携，大学院大学，学生交流，多様性]

1 はじめに

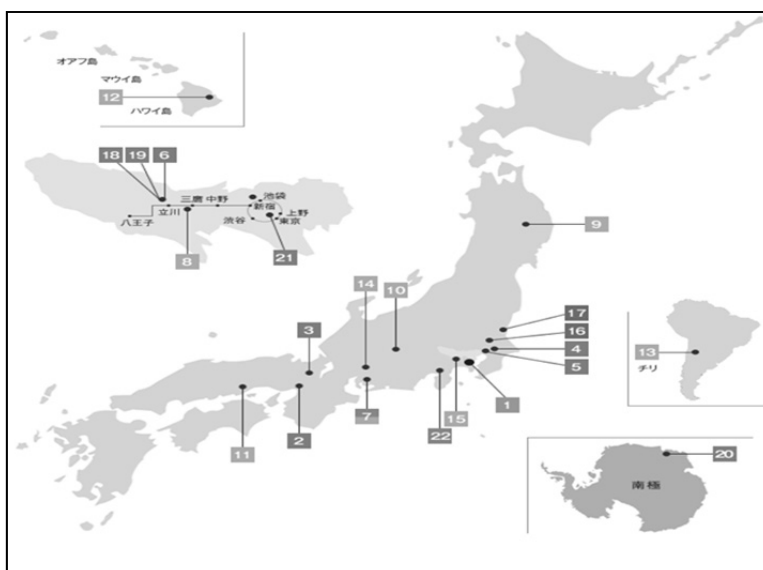
大学院教育イニシアティブセンターでは、設置方針の中で、国内外の高等教育研究者等を客員教員やアドバイザーに委嘱してアドバイザー会議による助言を得るだけでなく、国内外の関係機関との組織的連携を図り、定期的に連携協力会議を開催するとしている。

2011年度においては、アメリカ・マサチューセッツ州立大学アマス校（UMASS）に訪問して開催した第1回連携協力会議に続き、総合研究大学院大学（以下、総研大という）学融合推進センターとの間で第2回連携協力会議を開催する運びとなった。本センターと同じく、2010年度に開設された学融合推進センターが取り組む学融合教育事業を中心として、研究分野を超えた大学院教育のあり方について情報交流する事で、両大学の組織的連携が一層促進されることを目的とした。

2 前提と経緯

2.1 総合研究大学院大学の概観

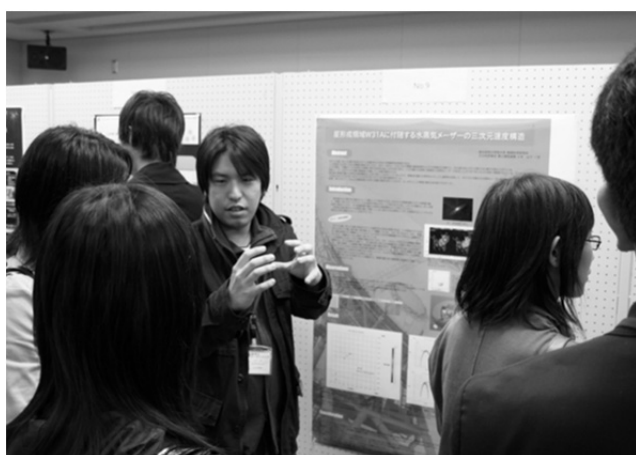
総研大は、4つの大学共同利用機関法人が設置する16研究所等と独立行政法人宇宙航空研究開発機構の研究機関を基盤機関として、6研究科21専攻及び附属図書館が設置されている。その配置は右図のとおりであり、典型的な分散キャンパスの形態をとっている。具体的には、先導科学研究科を除く5研究科は、各専攻が設置されている基盤機関がそれぞれ担当（分散型教育研



出典) 総合研究大学院大学ホームページ

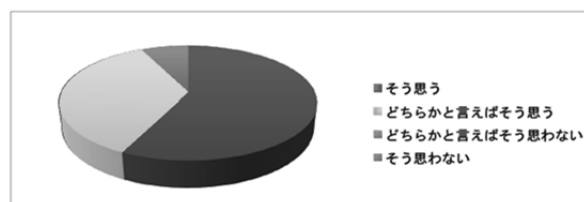
Ⅲ. センター関連イベント報告

究)し、学生は専攻が設置される機関で研究活動を実施している。先導科学研究科は、基盤機関及び葉山本部が緊密な関係・協力により共同して教育研究を実施している(総合型教育研究)。このような中で、学生は、基本的に大学本部がある葉山キャンパス(神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村)を研究活動の中心とし、研究計画に応じて全国18の基盤機関に展開して研究指導等を受けることになるが、研究科や専攻を超えた学生交流が希薄になりがちな状況がある。そこで、総研大では伝統的に入学時に学生セミナーを開催し、総研大生としてのアイデンティティを育む機会を大切にしており、近年では、総合型教育研究を支援するための全学共同教育研究組織として、学融合推進センターを設置して、学生交流の活性化を狙いとした組織的活動を推進しようとしている。



1-2. 総研大ワークショップ全体を通じて、
他専攻の研究に対して理解が深まった?

項目	回答数(人)
そう思う	16
どちらかと言えばそう思う	10
どちらかと言えばそう思わない	2
そう思わない	0



出典)『第1回総研大ワークショップ報告書』pp. 23, pp. 26

2. 2 総合研究大学院大学 学融合推進センター訪問を経て

総合研究大学院大学 学融合推進センターとの繋がりは、2011年3月中旬に開催された京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第17回大学教育研究フォーラム」において、同センターの奥本素子助教の研究発表を筆者自身が聴講させていただいたことに端を発している。その後、同センターの活動報告書である『研究のサードプレイス』の中で、今後の可能な戦略として、北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンターとのネットワークを取り上げていたことから、同センターの岩瀬峰代専任講師にニューズレター(CG EI NEWS)において、「総合研究大学院大学における大学院生を主体とした教育プログラム ～大学院生が創り出す学際交流～」と題して寄稿いただいた。

このような交流の傍らで、総研大の学生が中心となって、奈良先端科学技術大学院大学、政策研究大学院大学と本学とともに、国立の4大学院大学による大学院生交流会を企画する動きがあることを知った。

(その後、総研大・奈良先端大・北陸先端大の3大学でのイベント企画へと進行した。)岩瀬専任講師のご配慮により、10月上旬に総研大・葉山キャンパスで、1泊2日の合宿形式として開催された企画イベント打合せ会に参加させていただく機会を得た。当日は、総研大・学生7名、奈良先端大・学生2名、北陸先端大・学生1名が参加し、熱心な議論が行われた。初日だけの参加であったが、学生の熱のこもった発言につられて、筆者自身何度か口を挟んでしまった(右写真参照)。



具体的には、各大学の代表学生から企画提案が行われ、それを受けて、12月上旬に開催予定の「大学院生交流会」企画のコンセプトの確認と、初日に行う「異分野クロストーク」のテーマ設定、企画形式、タイムスケジュール、二日目に行う「大学院生キャリアパスセミナー」の講師の候補、講師に話して頂きたい内容、ディスカッション時のテーマ設定、企画形式、タイムスケジュールについて議論が進んだ。

参観させていただいて感じたことは、「このような機会を通して先端大の先生や学生と研究交流がしたい」「研究機関で研究をしているとほとんど人に会わない日もあったりするので、このようなイベントは有意義」「来年に繋げられるように、初年度の今年は絶対に成功させたい」といった発言のほか、異分野同士の学生が対話する際にどのような話題や展開を行えば効果的かということに真剣に議論する姿が印象的であった。広い視野や新しい視点を持ちたいという学生の目の輝きがそこにはあった。

学融合推進センターが支援しているこのような活動は、調査研究機能が強い本センターにとって非常に参考となるものであり、新たなヒントを与えていただいたように感じている。この訪問内容については、筆者自身が話題提供を行った第14回サポート・ボード「大学院教育イニシアティブセンターの可能性」において披露し、参加者から肯定的なコメントをいただいた。

3 第2回連携協力会議の開催

2012年2月14日(火)午後、第2回連携協力会議として、総合研究大学院大学学融合推進センターとの会議を行った。当日は、総合研究大学院大学 学融合推進センターから、桂 勲名誉教授、颯田葉子教授、岩瀬峰代講師、奥本素子助教の4人の先生がお越しになられ、意見交換に花が咲いた。

まず、浅野センター長より、北陸先端大における大学院教育の特徴や新教育プランほかの各種取組について紹介があった。先端領域基礎教育院が提供する授業科目の内容について質疑があり、総研大側からは入学時の学生セミナーの取組が紹介された。また、階層的なカリキュラムを構成していく上での授業科目間の関係性に関するコンセンサスを確保する点について質問があり、情報科学研究科での知識単位(ユニット)ごとの授業科目整理作業が紹介された。更に、正規の授業科目を補う仕組みの有無についても質問があり、導入科目の設定やオフィスアワーでの復習機会などが紹介された。



後半では、大学院教育イニシアティブセンターの取組が紹介され、研究室教育ポートフォリオや試験問題データベースのコンセプトについて意見交換があった。

最後に、全学的な教育方針の必要性やそのコンセンサスの確保、その際のセンター組織の関与の在り方などについて意見交換があった。多様な学生を受け入れているというお互いの共通点を通して、学生交流の活性化を図ることができるのではないかとという点で意見が一致し、今後、更なる交流を進めることとした。

4 まとめ

これまで、本学と同様に先端大学院構想を源に設置された奈良先端科学技術大学院大学の存在を強く意識しながら、切磋琢磨を繰り返してきたところがある。国立の大学院大学として、総研大との接点も多いのではないかと改めて認識したところである。総研大は地理的にも学術領域的にも複雑な組織であること

Ⅲ. センター関連イベント報告

を日常的に自覚する中から、研究者・学生ともに学融合推進しようとする動きを組織的に行わなければならない強い意識が働いているように感じた。その点において、本学でも特色ある3つの研究科をうまく融合することはできないかといった議論がよく聞かれ、学内連携セミナー（現・J-BEANS セミナー）が行われているが、研究科を超えた学生交流といった点については決して活発ではなく、総研大の学生交流活動には参考にすべき点が多い。学際的な研究科を抱えるお互いの大学院大学は多様な学生を受け入れており、そのような多様性に富んだ環境をメリットとして教育研究活動にうまく溶け込ませることができたら素晴らしいことである。

以上のように、今回の連携協力会議では、組織的性格を同じくした大学との情報交流を通して、本学の教育活動や学生支援の現状を省察する格好の機会となったように思う。

5 参考文献

総合研究大学院大学ホームページ(<http://www.soken.ac.jp/index.html>, 2012.5.23)

総合研究大学院大学（2008）『第1回総研大ワークショップ報告書』 pp.23,pp.26

総合研究大学院大学（2011）『総合研究大学院大学 概要』

総合研究大学院大学 学融合推進センター（2011）『研究のサードプレイス』（「学術交流事業」「実践的な問題解決を持つ研究者養成のための全学連携推進活動の推進」活動報告書）

総合研究大学院大学（2012）『研究力を探る』（「学術交流事業」「実践的な問題解決を持つ研究者養成のための全学連携推進活動の推進」活動報告書）